

論文の要旨

論文題目 日本語の「共感覚的比喩（表現）に関する記述的研究
氏名 酒井（武藤）彩加
学位 博士（文学）
授与年月日 平成 15 年 12 月 26 日

本研究の目的は、日本語における「『五感（視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚）』と『比喩』との関係性」を把握することである。ここでいう比喩とは、伝統的な文体論における装飾的な美辞麗句を指すのではなく、重要な概念形成の手段（特に転用のプロセスと概念体系の動機付け）としての比喩を指す。

従来、五感を表す語における意味の転用の記述は、もっぱら「共感覚的比喩（synaesthetic metaphor）」という枠組みの中で行なわれてきた。共感覚的比喩の理解については、その名前の由来である「共感覚（synaesthesia）」という心理学の特殊な現象と関連づけられるか、あるいは人間に備わった感覚器官の仕組みに基づいて比喩が成立し、かつ理解されるといったような生理学的な説明に依ってきた。また五感内における意味転用の方向性には、言語の相違を超えた共通性があるとされ、色彩語彙等と並び生理学的普遍に基づく言語普遍性の現象の一つとして注目されてきたことから、その特徴であるとされる比喩の「一方向性」に議論が集中し、異なる言語間の平行性ばかりがくり返し強調されてきた。結果、五感内の意味転用は、他の比喩（メタファー・メトニミー・シネクドキー）とは区別された「特殊な比喩」とされ、感覚間の転用の動機付けや具体的な比喩の在り方等、詳細についてはこれまでほとんど検討されてきていない。また言語普遍性の現象の中の日本語の個別の側面についても、従来十分に考察されてきていない。

そこで本稿では、共感覚的比喩の分析を通し、五感を表す語と比喩との関係性について、認知言語学の立場から共時的に記述し分析を行なうことをその課題とした。

まず、第 1 章において、問題提起と研究の目的について簡単に触れた。

次に、第 2 章では、共感覚的比喩に関する先行研究を検討した後、問題点を指摘し、本稿における課題を提示した。

第 3 章では、言語普遍性の現象とされてきた共感覚的比喩の「一方向性」について、日本語の言語事実をみた。従来、五感を表す「形容詞」のみが主に対象とされてきたのに対し、本稿では五感を表す「副詞」と「動詞」を加え、日本語の包括的な言語事実に基づいて五感と比喩との関係を再検討した。その結果「嗅覚から触覚への方向性」を除く五感相互で意味が転用されることを明らかにした。また、従来不可能であるとされていた「視覚」から他の感覚への転用例は豊富であり、逆に従来可能であるとされた「嗅覚」から他の感

覚への転用はほとんど為されないことを指摘した。つまり「触覚的領域からその他の感覚領域」という従来の一方向性に近い傾向性に加え、日本語においては「視覚の優位性」という特性が存在するのである。そこで従来全く同一とされてきた「英語」の研究と日本語の分析結果とを照らし合わせ、類似点、相違点をまとめとして明示した。

続く第4章では、日本語の味覚形容詞の多義構造の分析を通して、五感の一つである「味覚」における意味の転用を記述した。より妥当な意味の記述に向け、類義性あるいは反義性を持つと思われる形容詞を、次のように組み合わせて分析を行なった。

「甘い」と「辛い」

「渋い」と「苦い」

「酸っぱい」と

「まずい」と「うまい」、及び「おいしい」

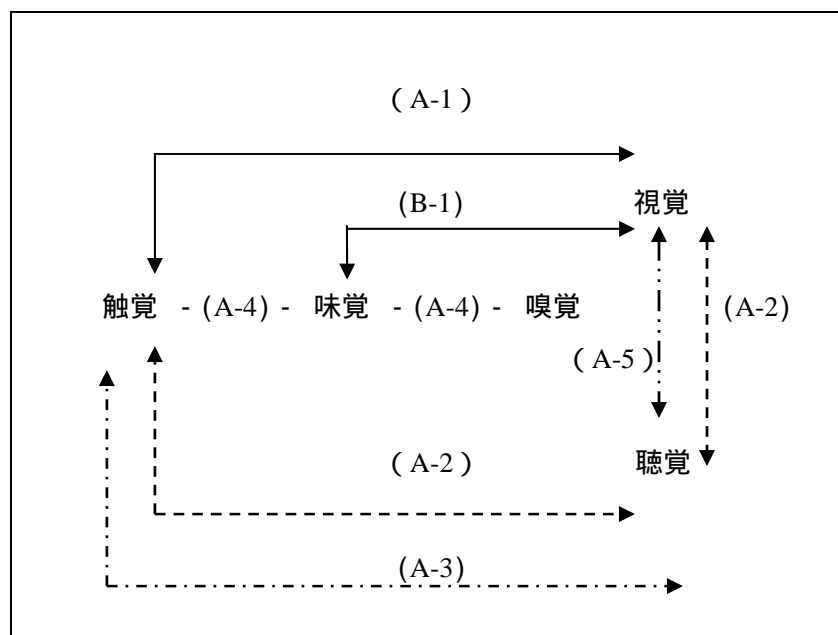
ここから、「甘い」と「辛い」及び「まずい」と「うまい」の反義性、そして「渋い」と「苦い」の類義性についても言及し、それらの結果から、日本語の味覚形容詞の意味記述をさらに進めた。また「おいしい」の新しい用法についても触れ、類義語とされてきた「うまい」よりもさらに広がりつつある「おいしい」の意味・用法、即ち味覚からの意味転用の可能性についても言及した。そしてここから、基本義である味覚から「直接」「メタファーにより」他の感覚領域への転用がある、即ち従来「共感覚的比喻」とされてきたものに大凡相当するのは「甘い」だけであるという点を主張した。また「渋い」や「苦い」における「視覚」への転用、さらに「甘い」と「酸っぱい」における「嗅覚」への転用については、同時性、あるいは時間的隣接に基づく「メトニミー」によるものであることを指摘した。最後に、従来説明できないとされてきた感覚間の意味転用の動機付けについては、感覚間だけを対象としていては説明できないもので、多義全体を記述することによってはじめて可能になるという点を確認した。

第5章では、五感を表す動詞のうち、ケース・スタディーとして「きく」「ふれる」「におわせる（におわす）」を取り上げ、その意味を分析した。先ず、動詞「きく」（聞・聴・訊・効・利）について、11の多義的別義を認め、意味を記述した。また、これらの多義的別義間の関係についても併せて考察し、比喻（メタファー・メトニミー）による意味の転用という観点から共時的に分析し、多義構造図を示した。そして、「酒をきく」（「聴覚」「味覚」的経験への転用）、および「香をきく」（「聴覚」「嗅覚」的経験への転用）という、動詞「きく」における「共感覚的比喻」表現を、多義構造全体の中に位置付け、「感覚間の意味の転用」現象の動機付けを明らかにした。続いて、五感を表す語の意味記述のひとつとして、「きく」、「ふれる」、及び「におわせる（におわす）」に共通に認められる「言葉を発する」という「発話行動的意味」に注目し、分析を行なった。分析の手順として、「発話手段」、「内容への言及」、「共同動作者格『～ト』」、「内容（判断態度）と機能（表出態度）」、「引用格」、「付随するニュアンス」等の項目を各々検討し、他の「発話動詞」（イウ、ハナス、ノベル、シャベル等）と比較する等して、「き

く」、「ふれる」、及び「におわせる（におわす）」と他の発話動詞との類似点を示した。そして分析の結果明らかになった、「きく」、「ふれる」、及び「におわせる（におわす）」間における相違点を表にして示した。

さらに、第6章では、「食感覚を表すオノマトペ」を「評価」と「感覚」によって分類し、用例とともに検討した。結論として先ず、日本語の食に関するオノマトペは「歯応え」を表し、かつ食品に対する「プラス評価」を表すものが最も多く（「さくさく」、「ぱりぱり」、「こりこり」、「しゃきしゃき」...）、次いで「乾-湿」を表し、食品に対する「マイナス評価」を表すものが多い（「すかすか」、「もそもそ」、「じめじめ」、「べたべた」...）。そして我々は、食品に対して十分な熱さ、冷たさを期待し（「あつあつ」、「ほかほか」、「ひんやり」、「きーん」）、「淡泊な味」を「おいしい」と感じる（「あっさり」、「さっぱり」、「すっきり」）。さらに「弾性」（「ぶりぶり」、「むちむち」...）及び「粘性」（「とろとろ」、「ねっとり」...）を表すものが多く食物の評価に関わるというのも特徴の一つに挙げられる。

また、「食に関するオノマトペ」における「共感覚的比喻」体系（=感覚間の転用という現象）は、以下に示すようになりかなり整理されることが明らかになった。



即ち、B-1 以外の共起する感覚間(A-1 ~ A-6)の関係は、全て「メトニミー」によって説明可能になると考えられるからである。この点についても注意を要する。

最後に、第7章では、感覚間の意味の転用のメカニズムを探った。先ず、前章までの分析を踏まえ、従来指摘されてきた「類似性」に基づくメタファーだけでなく、メトニミー（「時間的隣接」）が関わるという点を確認した。

続いて、山口(2003)の分析を踏まえ、さらに多くの共感覚表現においてメトニミーが関

わるという点について考察を進めた。以下の項目を加えたうえで、共感覚的比喩に関わるメトニミーについて網羅的に分析することを目指した。

- ・ 感覚器の隣接によるメトニミー
- ・ (二つの性質の)「同時性」に基づくメトニミー(生理的メトニミー)
- ・ (二つの事項の)「時間的隣接」に基づくメトニミー

結論として、感覚間の転用には、メタファーだけでなくメトニミーが関わる例が多く認められる。

加えて、「共感覚的比喩」における「共感覚(色聴)」現象と、従来「メタファー」研究において指摘されていた「二次的活性化(secondary activation)」現象との類似性について検討し、「複数のイメージが同時に生きていて新しい意味が出現する」という現象が、決して感覚間の意味の転用という現象固有のものではないという点を主張した。

さらに、従来「共感覚的比喩」と呼ばれてきた「五感内の意味の転用」について、「接触感覚から遠隔感覚」と「遠隔感覚内」の二つに大別して考察した。その結果、前者においては、「触覚」から「視覚」への転用に触覚的領域での経験を基盤とするメトニミーがその転用を支えているという点を指摘し、従来「感覚論」等で主張されてきた「視覚の触覚性」説を言語事実と共に確認した。また後者においては、ケース・スタディーとして「高い声」を分析し、「基本義(垂直次元)による動機付け」と「評価的要因による動機付け」といった、複数の動機付けが同時に存在し得る可能性を指摘した。

以上の考察から、従来「共感覚的比喩」と呼ばれてきたものについては、異なる比喩を含んだ複数の意味作用によって成り立つものであるということが明らかになった。よって従来、「ある種の類似性に基づくメタファー」としてメタファーの下位カテゴリーに位置づけられてきた共感覚的比喩について、比喩の一種としてあるレベルに一括りに位置付けることは適当ではないということ、再度まとめとして主張する。そして、共感覚的比喩について本稿では、「感覚間の意味転用という現象」に対する「ラベル付け」と捉え直す方がより妥当であり正確であるということ、結論として提示する。